



震災から10年を迎えて

福島県小学校長会

会 長 佐 藤 秀 美

令和3年3月11日、東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故から丸10年が経過しました。地震、津波、そして原子力災害、本県は人類史上初めての複合災害に見舞われました。幼児児童生徒を含め多くの尊い人命が失われ、今なおふるさとに帰還することが叶わず避難を余儀なくされている方々が数多くいらっしゃいます。発災後、本県の各小学校にあっては、「学校は復興の最大の拠点」の合言葉の下、「安全・安心」を最優先に校長がリーダーシップを発揮し、子どもたちを守り育てるため、教育環境の復旧・復興に全力を尽くしてきました。しかし、特に甚大な被害を被った双葉郡を始めとする避難地域の学校は、避難先で、しかも仮設校舎や間借りでの教育活動を行わなければならないなど、筆舌に尽くし難い困難を経験されました。廃炉には今後数十年を要し、復興はまだ道半ばです。根強い風評と急速に進む風化もまた、重い課題となっているのが現実です。

このような中、県小学校長会では、未曾有の複合災害の記憶と記録を「ふくしまの絆 ～学校は、復興の最大の拠点～」(平成25年1月刊行)、「ふくしまの絆Ⅱ ～輝く未来へ～」(平成29年3月刊行)、そして「ふくしまの絆Ⅲ ～我々がつなぐべき思いを～」(令和2年3月刊行)の3冊に綴ってきました。今般、「ふくしまの絆Ⅲ」をベースに、これら3冊の内容をとりまとめ、「ふくしまの絆 総合版」を新たに刊行いたしました。その意図は、校長の世代交代が急速に進む中、発災から10年の節目に県内の各校長に改めて震災の教訓を伝えることにあります。また、これまで様々なご支援をくださった皆様への恩返しとして、東北連小福島大会に参加される東北各県の校長先生方にお届けしたいと考えました。そして、巻末には福島県教育委員会が刊行した放射線教育・防災教育実践事例集の一部を掲載し、各学校における今後の放射線教育・防災教育に役立てていただきたいとの思いも込めました。残念ながら「フクシマ」を背負って生きていかなければならない本県の子どもたちが、将来謂れない偏見や差別を受けることがないように、また科学的な根拠を基に自分の言葉で相手を納得させる力を身に付けることができるよう努めることも私たちの責務である、そう考えています。

本書を手にとられた皆様には、当時の校長を始めとする教職員が強い意志と使命感を抱き、どのように困難を乗り越えてきたのか、そこに何を感じ、何を教訓として生かしていくのか、何を語り伝えていくのか、自問自答しながらご自身の「解」を見い出していただければ幸いです。

結びに、絆3部作に玉稿をお寄せいただいた皆様、ご協力くださった県教育委員会、編集等に当たった県小学校長会広報部長を始め幹事の皆様、そして発災以降、子どもたちの教育に携わってこられたすべての皆様に心からの感謝を申し上げ、刊行のあいさつといたします。

「東日本大震災記録集 ふくしまの絆 総合版」の内容構成について

○ ふくしまの絆 ～学校は、復興の最大の拠点～ より抜粋

- ・ 発行日：平成 25 年 1 月
- ・ 趣 旨： 震災から 2 年が経過し、大災害により被害を受けた当時の各学校の状況や災害時の校長としての判断、対応等を記録にまとめた。また、「学校は、復興の最大の拠点」を合言葉に、ふるさと「ふくしま」の再生に向けた学校再開の取組を収めた。
- ・ 内 容：第 1 章 その時、子どもたちは
第 2 章 その時、わたしたちは
第 3 章 学校再開に向けて
第 4 章 復興元年・2 年目の取組
資 料 ・「特別部会」の設置について
・平成 24 年度福島県小学校長会行財政部特別調査

○ ふくしまの絆 II ～輝く未来へ～ より抜粋

- ・ 発行日：平成 29 年 3 月 1 日
- ・ 趣 旨： 震災から 6 年が経過し、少しずつ復旧・復興の歩みを進めてきた。校長からは震災以降の子どもたち一人一人を学校がどのように育んできたのかについて、保護者からは困難な状況の中で子どもたちを守るための親の取組について、子どもたちからは震災に負けずに夢に向かって努力する様子について、文章を集め、記録にまとめた。
- ・ 内 容：第 1 章 あの日、あの時、そして輝く未来へ
(1) 学校再開・再生とその後、
(2) 震災・原発事故と避難児童を受け入れた学校、
(3) あの日の子どもたちは今…未来の夢
第 2 章 座談会「あの日、校長として。そして輝く未来へ。」(割愛)
第 3 章 福島の教育 そして輝く未来へ
(1) ふるさと「ふくしま」の未来を担う子どもたちの育成に向けて
(2) あの時私たちは今、そして輝く未来へ
資料編 ・福島県環境創造センター交流棟(愛称：コミュタン福島)

○ ふくしまの絆 III ～我々がつなぐべき思いを～ より抜粋

- ・ 発行日：令和 2 年 3 月 11 日
- ・ 趣 旨： 震災から 9 年が経過し、次第に記憶が薄れていく中で、当時、困難や試練に直面しながらも教職員が強い意思と使命をもって取り組んだ様子を改めて県内の各校長に伝えることで、「記憶の風化」を食い止め、県小学校教育の充実に寄与するものと考え、記録にまとめた。
- ・ 内 容：「東日本大震災被災地懇談会及び視察 報告」
「座談会『疾風勁草』」
「東日本大震災後 9 年の復興のあゆみ 特色ある取組」
「震災から学び 伝えたい教訓」
「学校再開のあゆみ」

※ 「ふくしまの絆」「ふくしまの絆 II」は、縦書き・右開きで制作された。また、「ふくしまの絆 III」は、横書き・左開きで制作された。総合版では、横書き・左開きで統一し、編集・制作した。また、執筆者の役職・学年等は、それぞれの発行時のままである。

○ 「ふくしま放射線教育・防災教育実践事例集」 より抜粋

福島県教育委員会では、これまで「放射線等に関する指導資料」「防災教育指導資料」を作成し各学校に配付してきた。さらに、放射線教育・防災教育の様々な取組を実践し、平成 31 年 3 月に「ふくしま放射線教育・防災教育実践事例集」を刊行した。このたび、福島県教育委員会のご協力のもと、実践事例集の一部を「総合版」に掲載することとした。

(掲載学校名) 放射線教育：三春町立三春小学校 西郷村立熊倉小学校
南会津町立南郷小学校
防災教育：福島市立佐倉小学校

※ 放射線教育・防災教育の実践事例を掲載するにあたって
東日本大震災と福島第一原子力発電所事故からの経験を踏まえて、本県においては、放射線や防災に関する知識を習得し活用して、自ら考え、判断し、行動する力、等の「生き抜く力」を身に付けさせることを目的とし、放射線教育・防災教育の推進を図ってきた。各学校においては、放射線教育・防災教育を教育課程に位置づけ、系統的な教育を進めてきたところである。

一方で本県は、原発事故という例を見ない事故のため、子どもたちの中には言われなきいじめや差別を受けている子どもがおり、社会の中では風評被害が未だに続いている。こうした現状を正すためには、全国の学校で放射線教育の推進が求められる。具体的には、文部科学省が作成した「放射線副読本」を全国の学校が確実に活用し、放射線を正しく理解する教育を推進することである。新学習指導要領においても現代的な諸課題に対応して求められる教科等横断的な教育内容の一つとして放射線教育が例示されている。

こうしたことから、「総合版」に放射線教育・防災教育の実践事例を掲載した。これらの実践事例が本県に限らず、全国の学校の放射線教育・防災教育に役立てられることを強く願うものである。